

〔四〕 生徒会活動の指導と問題点

—— 生徒の無気力・無関心の実態とその対策 ——

都 築 亨 原 田 秀 雄 北 田 明 子
米 山 誠 三 谷 み ち へ 小 幡 正 躬

問題の所在

生徒とくに高校生の無気力、無関心が現在一般的現象となってきている。われわれが生徒会の指導を担当して一番大きく感じたのはその問題である。大衆社会状況に起因するのか、あるいは受験体制——受験中心にかたまりそうな現在の生徒たちの小学校から中学校・高校を通じて培われてきた学習態度がそうさせるのか。とにかくその現実を否定しがたいし、本校においてもその例外ではない。

一昨年来、全国の高校を通じてみられた少数の過激派高校生の動きは、ある意味ではそうした現実に対する反ばつとしてとらえるべきであろう。

その紛争自体、生徒指導、とくに生徒会を中心に指導にあたっている者にとって大きな問題にはちがいないかったけれど、紛争らしいものが落ちつきをみせたとき、校内の無気力・無関心、あるいは退廃的ムードは一層つよくなってきたのではないかと考えられる。

現在の生徒会の指導の力点は、生徒の要求をそらしたり、弾圧したりすることではなくて、全般的ムードとなっている無気力さ、無関心状況をいかにして打破し、生徒の自治活動をその本来の意味において組織し直してゆくことである。そしてその基盤はクラブ活動と、ホームルール、あるいはホームルーム活動と生徒会（執行部・諸会）との接点にあるのではないだろうか。

I クラブを通じた生徒指導

原 田 秀 雄 北 田 明 子

はじめに

最近本校では生徒会活動、HR活動、クラブ活動等生徒の自主活動が不活潑で沈滞しているようにみえる。その原因としては生徒個人個人のそうした自主活動に対する無気力、無関心さが考えられ、問題にされなくてはならないであろう。その無気力、無関心の実態をさぐり、原因を追求し、対策をたてるのが当面の課題となっている。ここではそれをクラブ活動の面からとらえ、その問題点の分析と対策について考え、生徒指導の一つの手がかりとしたい。

本校では昭和38年より校風改善の一環として、クラブ活動を振興して、無気力さから脱却し、力強いムードを作りあげようと生徒会、教官会議の両者でクラブ全入制をとりあげた。その方法は次のようである。

1. 生徒全員が原則として何れかのクラブに加入すること

活動はそれぞれのクラブの定める週2日以上活動日に出席することとし、高3だけは自由参加とする。

2. クラブは2期制とする

生徒会の役員交代と併せ、クラブの所属の変更、クラブ役員の交代を行なう。

3. クラブ活動の評価と対外活動への参加の禁止

クラブ顧問はクラブへの出席率、技能や態度についての総合評価を行ない、3段階評価法により、1学期と3学期末の成績通知表により生徒及保護者へ通知する。また学習成績評価が10段階評価で1、2という低い評価点が4個以上あるものについては対外的な活動への参加を禁止することとし

た。

4. その他

生徒会役員，委員のうち，図書，報道，放送の各委員は委員会の活動がクラブ同様であるのでクラブに参加しなくてもよい。クラブ予算をとまわないサークル活動に参加するものもクラブには加入しなくてはならないとした。

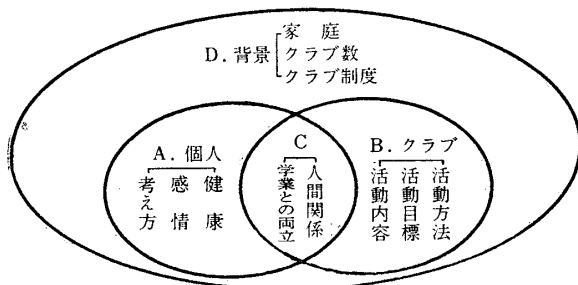
以上のような方法で発足した本校のクラブ活動も，当初のクラブ活動の活潑化の意図がマンネリ化し，無気力なものが増加の方向をたどるようになってきた。そこであらためて一度クラブについて考え，制度そのものについても新しい方向を見出す必要がでてきた。同時にこれは高校学習指導要領の改定に伴う，クラブ活動必修への新しい方向に対して今後どのように対応してゆくかということでもある。

問題点の予測

そこで，現在本校のクラブ活動がかかえている問題点を明らかにするために，生徒がクラブ活動に対してもっているだろうと思われる問題を予測し，それを次のように分類した。

- A. 生徒個人の精神や身体の状態から起きる問題
クラブ活動そのものに対する考え方，個人の感情や健康などによってひきおこされるもの
- B. 所属するクラブ自体のあり方から起きる問題
クラブの活動内容，活動目標，活動方法などについて，生徒個人の考え方の差からおこるもの
- C. 生徒個人と所属するクラブの両者の関係から起きる問題
クラブと学業の両立の問題やクラブ内の人間関係などによっておこるもの
- D. 生徒個人と所属するクラブの両者を含むまわりの背景となっているものから起きる問題
クラブ制度やクラブ数，家庭のクラブに対する考え方などからおこるもの

上の四つを図にすれば次のようになる。



クラブ活動の問題点はどこにあり，どうすればよいかについて，この四つの方向から考えてみることにした。

方 法

- 対象 本校生徒全員
- 手続 1. 調査
2. 結果の整理
3. 考察

調 査

前に述べたような四つの問題点についてのいくつかの設問について，五段階尺度法によって答える形で実施した。

調査者数

	男		女		計
	運	文	運	文	
中1	24	20	23	13	80
中2	32	10	41	4	87
中3	39	12	10	29	90
計	95 (69.3)	42 (30.7)	74 (61.6)	46 (38.4)	257
	137 (53.3)		120 (46.7)		
高1	61	24	31	26	142
高2	50	26	35	22	133
高3	45	28	19	35	127
計	156 (66.6)	78 (33.4)	85 (50.6)	83 (49.4)	402
	234 (58.2)		168 (41.8)		

数字は実数 ()内は%

(注)

運動系クラブ サッカー，水泳，卓球，テニス，軟式野球，バスケットボール，バドミントン，バレーボール，陸上競技，

文化系クラブ アマチュア無線，英語，演劇，化学(11クラブ) 家庭，合唱，郷土誌，茶道，地学，美術，ブラスバンド

結果の整理及考察

I 問題の糸口

参加の状態

1. クラブへの参加の実態

積極的参加（殆ど出席しているもの）

%	男		女	
	運	文	運	文
中1	66.6	75.0	73.9	69.3
中2	62.5	60.0	60.9	100.0
中3	48.7	41.7	30.0	13.8
高1	96.7	48.4	83.9	69.2
高2	92.0	50.0	57.1	81.8
高3	44.4	39.0	63.2	31.4

消極的参加（殆ど出席していないもの）

(%人数)	男		女	
	運	文	運	文
中1	16.6(4)	10.0(2)	4.3(1)	7.7(1)
中2	21.9(7)	40.0(4)	21.9(9)	0 (0)
中3	41.0(16)	50.0(6)	50.0(5)	58.6(17)
高1	1.5(1)	25.0(6)	9.7(3)	11.5(3)
高2	4.0(2)	38.4(10)	11.4(4)	4.5(1)
高3	35.5(16)	53.6(15)	36.8(7)	54.3(19)

2. 心理的参加の状態

クラブ活動を楽しみとするもの

%	男		女	
	運	文	運	文
中1	54.2	70.0	82.6	61.5
中2	53.1	50.0	53.6	50.0
中3	48.7	58.3	50.0	20.7
高1	77.1	45.8	80.6	42.3
高2	74.0	42.3	65.7	50.0
高3	77.7	53.6	73.7	42.8

3. 積極的に参加しているものは皆楽しくやっているか。

殆ど出席しているもので、しかも楽しむとするもの

%	男		女	
	運	文	運	文
中	67.2	80.8	80.0	59.0
高	68.8	45.9	61.2	60.4

クラブについてまず問題とするのは、この結果にあらわれているクラブに積極的に参加することのできないもの、活動を楽しくやることのできないものに対して、どのようにすればよいかという点である。そこでそうしたクラブ活動に対して不適応を起しているものの考え方や実態について調べた結果は次のようであった。

中学校クラブの問題点

1. 活動のしかたへの不満、クラブ数不足に対する不満が顕著にあらわれている。このことは本校のように生徒数の少ない学校共通の問題点であり、特に生徒全員をクラブに参加させようとする場合当然でてくる問題であろう。更に本校のように中高が一つの施設を使用している場合、その力関係は常に中学生のクラブ員へ圧力がかけられる結果となりやすい。その不満がクラブの活動のしかたに対する不満という形になってあらわれる。
2. 学業との両立の問題は、はじめの予想では中3に強くあらわれると想像していた。しかし実際は中1、中2の不適応を起したものの方に強くあらわれた。このことは学業成績の不振をクラブのせいにしてしようとする或る種の言いわけととれないこともない。下級生ほどクラブ活動の意義の理解と自主活動としての意欲に欠け、どちらかといえば無事にやらされるという意識が強いのではなからうか。そういう点ではこれからの指導の重点がこの方向に向けられねばならないであろう。

以上のことから中学校クラブの問題点は、クラブの活動方法や内容の背景となるクラブ数の問題と、クラブ活動の意義の理解という2点に焦点がしぼられるとあってよいであろう。

高校クラブの問題点

1. 全体的な問題として活動のあり方、顧問との人間関係、クラブ数の3つが問題にされなければならない。まず活動のあり方については、クラブの性格、活動内容が問題になる。クラブの性格については、クラブ活動はレクリエーションであるというものと、クラブは自分自身をきたえるためのきびしい場であるという2つの考え方にわけることができる。この2つの考え方が活動内容についても考え方のくいちがいをひき起している。

次に顧問との人間関係については、顧問の参加を希望するものと、参加を干渉と受けとるものに大別される。希望するものは、顧問との人間的な接触、技術指導まで含めた指導を期待し、それを現状では足りないとするものであり、干渉と受け

クラブを通じての生徒指導

中 学

	% (人数)	中 1, 中 2			中 3		
		全 員	ほとんど出席しないもの	楽しくないとしたもの	全 員	ほとんど出席しないもの	楽しくないとしたもの
	人 員 (名)	167	28	28	90	44	27
ク 体 ラ ブ 自 体 の 問 題	クラブ活動は楽しくないとしたもの	16.7 (28)	35.7 (10)	100.0 (28)	30.0 (27)	52.2 (23)	100.0 (27)
	活動のしかたに不満である	36.5 (61)	57.1 (16)	67.8 (19)	68.8 (62)	75.0 (33)	77.7 (21)
個 人 と ク ラ ブ の 間 の 問 題	クラブ内の人間関係がうまくいっていない	10.1 (17)	25.0 (7)	25.0 (7)	12.2 (11)	20.4 (9)	18.5 (5)
	クラブ活動は勉強にマイナスである	29.3 (49)	46.4 (13)	53.5 (15)	25.5 (23)	22.7 (10)	29.6 (8)
	クラブ活動は心身の健康にマイナスである	11.3 (19)	25.0 (7)	25.0 (7)	6.6 (6)	6.8 (3)	0.0 (0)
背 景 と な る 問 題	クラブ活動を家族が理解してくれない	18.5 (31)	21.4 (6)	28.5 (8)	20.0 (18)	20.4 (9)	11.1 (3)
	加入するときクラブ数が不十分である	31.7 (53)	60.7 (17)	53.5 (15)	62.2 (56)	63.6 (28)	77.7 (21)

高 校

	% (人 数)	高 1, 高 2		
		全 員	ほとんど出席していないもの	楽しくないとしたもの
	人 員 (名)	275	30	35
	クラブ活動は楽しくないとしたもの	12.8 (35)	63.3 (19)	100.0 (35)
個 人 の 考 え 方 の 問 題	クラブ活動は一般的に考えて役に立たない	6.9 (19)	50.0 (15)	51.4 (18)
ク ラ ブ 自 体 の 問 題	活動のしかたに不満足である	49.0 (135)	66.6 (20)	80.0 (28)
個 人 と ク ラ ブ の 両 者 の 問 題	クラブ内の人間関係がうまくいっていない	10.1 (28)	23.3 (7)	34.2 (12)
	顧問と人間関係がうまくいっていない	34.5 (95)	50.0 (15)	60.0 (21)
	クラブ活動は自分にとって役に立っていない	24.7 (68)	66.6 (20)	65.7 (23)
	クラブ活動は勉強にマイナスである	25.0 (69)	26.6 (8)	34.2 (12)
	クラブ活動は心身の健康にマイナスである	10.1 (28)	36.6 (11)	28.5 (10)
背 景 と な る もの の 問 題	クラブ活動を家族が理解してくれない	21.4 (59)	23.3 (7)	28.5 (10)
	加入するときクラブ数が不十分である	62.5 (172)	76.6 (23)	68.5 (24)

とっているものは、クラブのあり方、活動内容に がある。
 対する顧問の指導を干渉と受けとっているもので クラブ数については中学生にでたと同様、生徒

数の少ない本校の場合、全員加入の制度をとれば当然起こってくる問題で、生徒の希望するクラブを全て認めるとすれば、それぞれのクラブのクラブ員数が少なくなり、活動の機能を果し得ないものがでてくるのが予想される。

2. クラブに対して不適応を起しているものもつ問題はどこにあるかを考える。全体のもつ問題はこの集団に顕著に表われるが、特に極端なのは、クラブ活動に対する考え方で、クラブ活動は無意味であり、自分にとって役に立っていないという点であろう。このことが無気力、無関心をひきおこす大きな原因となっていると考えられる。クラブ活動に対する意義の理解がなされていないことは、活動意欲、自主性、協調性に欠けることは当然であろう。何のためにクラブに参加し、活動を行なうかを自分自身の中にもたないなら、たとえクラブに参加しても、意欲をもって活動を行なうことができず、楽しく活動できない。したがって出席率もわるくなる。出席しないからみんなからはみだしてしまって、たまに出ていっても楽しくないという悪循環をひき起している。

中学、高校両者の間にひき起される問題点

以上中学、高校それぞれの中にある問題とは別に、中高が同一施設、設備、組織をとっているために起ってくる問題がある。このことは公立の中学や高校のように別個の施設、設備をもっていけば起こらない問題で、施設、設備の共用が、クラブの活動日、場所、予算、活動方法、人間関係などに及ぼす影響は少なくない。

まとめ

クラブは同好者の集まりであり、強制されるべきものではないという考え方は正しい。しかし中学校や高等学校という学校教育の中にクラブ活動が位置づけられ、全生徒にクラブ参加の機会を与え、単なる同好会以上の機能を果すようになると同時に多くの複雑な問題を派生することは、過去の歴史的事実からみても明らかである。たとえばクラブが一部の生徒——特に運動クラブにおいては選手と呼ばれる集団——によって独占され、他の多数の生徒の参加の機会を奪っているという状態はよく見られるところであった。これに対し、本校で数年来実施してきたクラブ全入制は、全生徒に平等にクラブ参加の機会を組織的に作ったもので学校ムード改善の一環として生徒の自主活動を助長するように指導されてきた。そのために本校のクラブ活動は次第に活潑化した。しかしこのクラブ全入制は、自由意志による参加と、制度としての強制参加という二つの相反する両面をもち、その矛盾を解決しないままに、ここに分析したような種々の問題を常にもちながら続けられてきたのである。そこで無気力、無関心なムードの改善、自主活動の活潑化を再びクラブ活動に期待するとすれば、ここで明らかになった問題点を更に検討し、解決の方向に向ける必要がある。

以上今回の調査によって明らかにされた問題点の中には生徒個人に関する問題、クラブ自体のもつ問題、クラブと生徒個人の両方の接点におきる問題、クラブと生徒個人両者の背景となるもののもつ問題と、われわれが予測したあらゆる分野にわたって多かれ少なかれ問題が分散している。そうした問題のすべてを今すぐに解決するというわけにはゆかぬかも知れない。しかし、解決への努力については今後われわれに与えられた課題として真剣に取り組んでゆきたい。